

周縁に生きる人々の「声」としての「手記」

—金子文子『何が私をこうさせたか』を中心としたジャンルの考察—

シャヴィス ゴンサルヴィス ピント フェリッペ

本発表では、金子文子（1903-1926）の著書『何が私をこうさせたか』（1931）を中心に据え、「手記」というジャンルを通じて、周縁に生きる人々が自らの「声」をより効果的に表現できる可能性を提案したい。本発表の目的は、金子の作品とその執筆状態を分析することにより、「手記」と周縁者の「声」との関わりを明らかにすることである。これにより、ある社会・文化ヘゲモニーを維持する文化生産の一つの事例である文学作品の中でも、「手記」というジャンルが脱植地的な特性を備えていると論じたい。

金子文子は大正時代のニヒリストかつアナーキストであり、大逆罪で起訴され有罪になり、獄死した人物である。8歳まで無籍者として経済的、精神的に過酷な生活を送っていた。その後、母方の祖母の戸籍簿に登録され、父方の祖母に当時日本の植民地であった朝鮮に連れて行かれた。そこで親戚に過酷な虐待を受けた結果、13歳の時に、自殺を試みたが、途中で諦めた。16歳で日本に戻り、17歳の頃に自立を獲得するために単独上京した。苦学しながら、経済的、精神的な苦勞を経験し、様々な思想と人々と接触した。その生涯は、獄中で、そして大逆事件の裁判の判事のすすめによって書かれた手記である『何が私をこうさせたか』に記されている。その作品によって、幼少期から周縁に生きていた金子は自分の「声」を社会の中心にいる人々までに聞かせたと見えよう。

このような独特な事例と状態を踏まえつつ、自照性、内面的な深さを持つジャンル、とりわけ「手記」というものが周縁者の「声」の表現の一つの方法としてどのような役割を果たしているのかを考えたい。そのため、特にバフチンのスピーチ・ジャンル論とデコロナイゼーション（脱植民地化）論に基づいて、本発表で使用する「手記」の概念を設定し、「自叙伝」や「回顧録」などとの区別を明らかにしてから、作品とその執筆状態を分析したい。

周縁に生きる人々の「声」としての「手記」

—金子文子『何が私をこうさせたか』を中心としたジャンルの考察—

筑波大学 シャヴィス ゴンサルヴィス ピント フェリッペ

一、はじめに

本発表では、金子文子（1903-1926）の著書『何が私をこうさせたか』¹（1931）を中心に据え、周縁に生きる人々が「手記」というジャンルを通じて自らの「声」がより効果的に表現できると提案したい。目的は金子の作品とその作品の執筆状態の分析によって、「手記」と周縁化された人々の「声」とのかかわりを明らかにすることである。よって、そもそもある社会・文化ヘゲモニーを維持する文化生産の一つの事例である文学作品の中でも、「手記」というのが脱植地的な質をもつ特性があると論じたい。

金子は大正時代のニヒリストかつアナキストであり、大逆罪で起訴され、有罪になり、獄死した人物である。8歳まで無籍者として経済的、精神的に過酷な生活を送っていた。その後、母方の祖母の戸籍簿に登録され、父方の祖母に、当時日本の植民地である朝鮮へ連れて行かれた。そこに親戚にしきりに虐待された結果、13歳の際、自殺を試みた。しかし、途中で、世界中の抑圧された人々と同一視し、早期に独特な階級意識が芽生え、自ら命をたつことを諦めた。その代わりに、生きていく間にしか達成できない復讐を想像し始めた。それについて金子は次のように述べる。

柳の木によりかかりながら静かに考え込んだ。私がもしここで死んだならば、祖母たちは私を何と言うだろう。母や世間の人々に、私が何のために死んだと言うだろう。どんな嘘を言われても私はもう、「そうではありません」と言いひらきをすることはできない。

そう思うと私はもう、「死んではならぬ」とさえ思えるようになった。そうだ、私と同じように苦しめられている人々と一緒に苦しめている人々に復讐をしてやらねばならぬ。そうだ、死んではならない。²

その後、16歳で日本に戻り、17歳の頃に自立を獲得するために単独上京した。苦学しながら、経済的、精神的な苦労を経験し、様々な思想と人々と接触した。その生涯は獄中でそして大逆事件の裁判の判事のおすすめで書かれた手記である『何が私をこうさせたか』

¹ 金子文子「何が私をこうさせたか」『わたしはわたし自身を生きる』鈴木裕子編著、梨の木舎、7-289、2013。

² 同書、124項

に載せてある。その作品によって幼少期から周縁に生きていた金子文子は自分の「声」を社会の中心にいる人々までに聞かせたと見えよう。

このような独特な事例と状態を踏まえつつ、自照性、内面的な深さを持つジャンル、とりわけ「手記」というのが周縁に生きる人々の「声」の表現の一つの方法としてどのような役割を果たしているのかを考えたい。そのため、特にバフチンのスピーチ・ジャンル論とデコロナイゼーション（脱植民地化）論に基づいて、本発表で使用する「手記」の概念を設定し、それと「自叙伝」や「回顧録」などとの区別を明らかにし、論じる。

二、ジャンルとしての手記について

本発表で採用している「ジャンル」という概念はバフチンの「スピーチ・ジャンル」から来たものである。要するに、ジャンルは、ある程度決定している「発話」によって、文学作品から日常会話までの言語的な活動で、話し手と聞き手との積極的なやり取りが行われ、二方通行のコミュニケーションということを示している。また、「発話」とはコミュニケーションの最も基本的な分析の単位であり、話し手が変わると発話が終わるということである。したがって、すべての言語手段の選択は、話し手が、相手とその予想された反応から様々な影響を受け、行うものだとバフチンは強調する³。

こうして、ジャンルの発話を考察するために、発話者とその発話相手の立場を最初から考慮すべきである。すると、発話者がなぜあるジャンルにしたのか、もしくはなぜそのジャンルで表現させられたのか、またその発話相手はその発話に対する予想はどのようなものなのか、という点に関してより根本的に考え始められる。

その意味では、手記や自叙伝、回顧録などといった自照性、内面的な深さを持つジャンルの間に共通点もあれば、相違点も少なくはない。典型的に言うと、文体面では異なる点はほぼないが、内容的、また発話者と予想している発話相手の面では、様々な違いがある。例えば、一般的に誰でも自叙伝や回顧録で表現ができるといっても、発話相手はその文章を自叙伝や回顧録として認識しないと、事実上ではそのジャンルの成立条件が満たせないため、コミュニケーションの失敗の恐れもある。そこで、社会的にある文章を自叙伝や回顧録として認識されるために、誰かがそしてどのような内容でそれを執筆すればふさわしいのかを最初に明らかにしないと行けない。一般的に自叙伝と回顧録はある意味で社会的に成功した人物によって書かれるものであり、その成功と関わる内容が収録する。一

³ Bakhtin, M. M. The problem of speech genres. In: *Speech genres and other late essays*. Texas: University of Texas Press, p. 60-102, 1986, p. 60; 66; 99 and *passim*.

方では、手記というジャンルは一般的な人々、また不名誉な理由で目立つ人物（捕虜・獄囚等）の生涯や経験と関係する傾向があり、「自分史」として扱われることもある。⁴

こうして、手記というジャンルは、平凡で、ありふれたものであり、社会でごく普通の生活を送り、並外れた行為をあまりしない人々、あるいは、あるヘゲモニーイデオロギーによって非難されるべき行為をしたために、非日常的な経験を経た人々の生涯の記録を収録するものだといえよう。その意味で、周縁に生きる人々も自分の生涯について、また個人的な文章を書こうとすると、手記が社会的にふさわしい。そのため、それによってより効果的に自分の「声」を社会の中で表現できる。

三、金子の獄中の手記と周縁に生きる人々の声

金子文子の生涯を一人称で記録する『何が私をこうさせたか』は獄中でそして大逆事件の裁判の判事のおすすめで執筆されたもののため、典型的な獄中の手記として捉えられる。獄中の手記は、社会的にあまり好意的に受け止められていないにもかかわらず⁵、当時の日本では広く読まれていた⁶。しかし、それは罰する者（すなわち社会とそれを構成する主体）の罪悪感を昇華によって軽減するために、苦しみをスペクタクル化する必要性として理解する可能性もかなりある⁷。この意味で、これらの著書に注目されるのは、むしろ、他者、つまり囚われ人への関心というよりも、一般化された覗き見（*voyeur*）願望なのである⁸。

このような文章は、社会的に語る権利が常に奪われていた主体がそのジャンルによって一人称で自ら自分の話を語ることにより、証言（*testimonio*）の質もある⁹。こうして、語り資源としての事実の物質性を重視する傾向は、耳を傾けてもらいたいという願望、沈黙させまいとする抵抗の意志を示唆する。したがって、手記は、反ヘゲモニー的抵抗の一つのかたちである「抵抗文学（*resistance literature*）」¹⁰として扱える。その意味において、抵抗文学の一つの特徴は、個人のブルジョワ的作家性の概念を解体し、「集団的」作

⁴ 手記と自叙伝や回顧録の違い、また自分史と手記のかかわりに関する詳細は、馬場敦「自分史について」『高齢者住宅仲介センター』、ウェブサイト、2014 と山下洋輔「日本における自分史の特色」『早稲田大学大学院教育学研究科紀』、第16巻、1号、219-228、2008を参照する。

⁵ Colvin, Sarah. The Credibility of elves?: narrative exclusion and prison writing. In: Kelly, Michelle; Westall, Claire (org.) *Prison writing and the literary world: imprisonment, institutionalization and questions of literary practice*. New York: Routledge, p. 21-37, 2021, p. 21.

⁶ 副田賢二『〈獄中〉の文学史：夢想する近代日本文学』笠間書院、2016、16項。

⁷ Foucault, Michel. *Vigiar e Punir: nascimento da prisão*. Petrópolis: Editora Vozes, 1999を参照。

⁸ Colvin, Sarah. *Unerhört? prisoner narratives as unlistened-to stories (and some reflections on the picaresque)*. *The Modern Language Review*, v. 112, n.2, p. 440-58, 2017, p. 458.

⁹ Randall, Margaret. ¿Que es, y como se hace un testimonio? *Revista de Crítica Literaria Latinoamericana*, v. 18, n. 36, p. 23-47, 1992を参照。

¹⁰ Harlow, Barbara. *Resistance literature*. New York; London: Methuen, 1987を参照。

家性を創造することである¹¹。言い換えれば、その文学は個人化されたブルジョア的自己を創造する目的で書かれているのではなく、むしろ、個人的な経験を通して、あるヘゲモニーイデオロギーによって加えられた苦難を共有する証言となろうとする集団的文書として書かれているのである¹²。金子文子が無戸籍のために学校に通えなかったことを嘆きながら、次のように述べるどころからこのような集団性の構造がうかがえる。

小学校は出来た。中学校も女学校も専門学校も大学も学習院も出来た。ブルジョアのお嬢さんや坊ちゃんが洋服を着、靴を履いてその上自動車に乗ってさえその門を潜った。だがそれが何だ。それが私を少しでも幸福にしたか。[...] 無論、その頃の私はまだ、あらゆる人の喜びは、他人の悲しみによってのみ支えられているということを知らなかったのだった。¹³

金子が証言しているのは、子供の頃に受けた差別の個人的な体験に相違ない。しかし、この体験は、この箇所から読み取られるように、あるエリートたちによって押しつけられた集団的な苦しみを通して初めて成り立つものなのである。その意味で、血縁関係さえもこの抑圧の絆を越えることはできない。金子は、高という韓国人の下男が父方の家族から受けた屈辱を思い出し、怒りを次のように表現する。

ああ、内のこの悪戯と外の悼ましい心とのこの対照よ。子供ながらに、いや、子供なればこそ私は、叔母と祖母とをこの時ほど純真な正義感の上から憎んだことはなかった。高は答えるのだった。¹⁴

金子の主体と物質世界との結びつきは、血縁から導き出されるものではなく、抑圧によって成立されたものである。金子の反ヘゲモニー的な姿勢と、自らを主体化する手段として集団に求める彼女の作品は純粋な希望の真摯な表現でもある。金子は次のように述べる。

私として何よりも多く、世の親たちにこれを読んでもらいたい。いや、親たちばかりではない、社会をよくしようとしておられる教育家にも、政治家にも、社会思想家にも、すべての人に読んでもらいたいと思うのである。¹⁵

最後に、金子の作品に見られるこうした特徴こそが、周縁に生きる人々にとって手記が持ちうる反ヘゲモニー的な力を例証していることを強調する。

¹¹ Kaplan, Caren. Resisting autobiography: out-law genres and transnational feminist subjects. In: Smith, Sidonie; Watson, Julia (org.). *De/colonizing the subject: the politics of gender in women's autobiography*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1992. p. 115-137. p. 121.

¹² Harlow, p. 120.

¹³ 金子、26-7項。強調は筆者によるもの。

¹⁴ 同書、89項。

¹⁵ 同書、17項。